

# 同音語の共通要素

— 生活名彙を中心にして —

十 河 直 樹

## 1. はじめに

同音語を同音異義語ともいいます。カキと言っても「牡蠣」、「柿」、「火気」なのかは、要領を得ません。こういった事は日常茶飯事の事です。ただ、話の前後で自分なりに判断している場合が多いようです。したがって、「無情」と「無常」などの誤解がありません。同音であってアクセントが同様である訳ではないようです。

これは、日本語の長点であり、欠点でしょう。

①漢字の音訓 ②造語 ③和語の五十音（清音、濁音、半濁音、拗音、撥音）④アクセント ⑤方言などにその要素が内包されていると考えられます。

つまり

話を逆に発想して、牡蠣という海産物や、木になる柿に対して、なぜ「カキ」と呼ぶようになったかと言うことです。牡蠣と柿を比べて似ている点はありません。アクセントと表記（漢字）が違うようで、この異なる要素の物、ことがらの表現を、なぜ同音で表現するようになったのか。それは単なる偶然なのか。それとも、ある一定の法則というか、約束、基準というようなものでなされたものか。研究途上一端を述べてみたいと思います。

## 2. 音と要素との関係

(1) 言葉は事柄の端です。ですから事柄が説明、解明できれば、別に問題はない訳ですが。それは、事柄を主体にした考え方であって、言葉を研究する側からみれば無理というか、不都合な事が多々生じるとおもいます。

- 1、本来、言葉は事柄を説明、解説する役目の音声の基準だった符合。
- 2、従って、時代や、地域、年層、性別等で変化のあることは当然の事です。
- 3、その変化、改造された言語の形態を解析することは、元の言語形態を明確に、細密に捕らえて解析する必要があります。古語の解析ですが、しかし、この研究にも、音声言語には限界があります。表記の点でも、あいまいさがあります。「てふてふ

」と表記して「ちょうちょ」と音読させる一点をみてもうなずけましょう。

- 4、別の観点から、漢字の渡来で、音読、訓読と、湯桶読みと、重箱読みと言った点。それに、当て字読みといった独特の技法があります。

- (2) 本来、言葉は、社会の便宜上に用いられた符合で、記上の諸点らもつれた現象で、さらに複雑化され、取捨選択され、洗練されて今日の現代用語が造形されていると  
いってよいでしょう。
- (3) しかし、動かされない一点があります。それが要素だといっていいと思います。
1. カキという音形に対して、牡蠣、柿、火気、花器、夏期などという用語が暗示できますが、文言の前後で理解でき、しかも話が一つのテーマに従っての話方であれば、それもさしたる問題ありません。しかし、それは日本人の日常の訓練と、生活組織化によるところです。
  2. カキという音声と同音でも、牡蠣と柿は本質的に違います。しかし、やはり同素です。
  3. ここでは、この点「同音異義同素語」を問題にしたいのです。

### 3. 実例

#### ◆ 一音の場合

##### ● ラの場合

- (1) 羅生門、閻魔＝閻羅、埒、拉致、羅針盤などは、ラという音が接頭語にあります。これらの用字と使用される方面はまったく関係ありません。しかし、要素の点で、ラという音は共通しています。
- (2) 羅生門も閻羅、拉致、埒、羅針盤も、ある一定の域の限界を意味しています。  
羅生門は、門でもある領地の端にある門。拉致は、(いきたくない者を)無理に引き取って、連れていく。埒は、物事のくぎり。＝限り。羅針盤は、無限の域を推し測る(計具)。

##### リの場合

- (2) すり(拘摸)、割り、栗、霧、無理、鳥などは、その形態が丸い。または、丸くなったよう。
- 拘摸は、物に添って(奪い取る)。割りは、物を(道具を用いて)捲るように開ける。栗は、楕円形に似た形態。霧は、方丈で、一滴の水は玉状をなしている。無理は、理が纏れ、絡んで(団子状)で、円形状態。鳥は、巢に居る状態は、や

はり楕円形。

### モの場合

- (2) 藻、門、桃、藕、漏れる、餅、腿などは、もつれあった一塊のもの。

藻は、水中では糸状で、波に揺れて絡んでいる。門は、上空から見ると、人が出入りしている状態が、やはり糸のもつれた状態に見える。藕、餅は、その固体を二つに割って引くと、数本の糸状をみせる。桃、腿は、モが元の形態で、桃を食べると、種から果肉が糸状になっている。その重音が桃で、腿は、桃の種が二つに割れる点と、身体（女性）の、腿とを掛けたもの。

## ◆ 二音の場合

### カ キの場合

- (2) 牡蠣、柿、火気、花器、夏期などは、堅いもので覆われています。

牡蠣も柿も、表皮が「固い皮で覆われている」という点。他の火気、花器、夏期は、造語で、カとキの合成語。

### キ リの場合

- (2) 霧、桐、錐は、方丈、円筒状の形態になっている現象に指示した呼名。

霧は、「霧を吹く」「霧がたちのぼる」と言うように方丈。桐は、立木の形態を遠視すれば分かるように、三角形の方丈をなしている。錐は、その刃の形態が、やはり三角形をなしている。

### ウ ミの場合

- (2) 海、膿は、本来動詞の連用形（名詞）の形態をとっている。ウムが原形で、ウという音には、意味が無い。ミに意味があって、本体、実態を意味します。

### ボウ、ホウの場合

- (2) 傍示、防波堤、坊主、暴風雨、暴動、帽子、墓穴などは、ものの、物事の終止。

または、果てを意味しています。

傍示は、行政管轄地域の先端地域。防波堤は、守るべき海域の先端の堤。坊主は死人と健常者（生人）との境を司る、先端の人間。暴風雨は、嵐の最高の状態。暴動は、人間の秩序を乱し、荒れ狂った状態。帽子は、頭部の先端（頭頂部）を覆う袋状の物。墓穴は、穴の種類の内でも、最終、末端の穴。で、ボという音はホの裏面の要素をもっているようです。

## ◆ 三音の場合

### カワラの場合

- (2) 瓦、河原、川原は、カワ／ハラで川（皮）・原（腹）などの要素を持ちます。  
すなわち、ワの音とハの音とが衝突してワの一音に融合音と化した現象です。

## 4. 実例から（むすびにかえて）

1. 日本語は、音形から、五十音あるものの、音形態要素からみて、一音節、二音節までで、三音節以上はあってもまれでしょう。
2. 形態要素というものは、カという音を無数に分化して、カミ、カサ、カタチ、カントウ、カタナ、チカン、カリンというように、なぞらえ、固定化させ、名詞と定めたものを一語としたものと思われます。つまりカの要素は、それぞれの単語の中に生きていて、漢字の導入と融合して、紙、傘、笠、形、関東、刀、痴漢、花梨というように表示したものと思われます。
3. この、音形態要素は、音形の五十音もなく、清音数の何パーセントかの領域を責めるに至り、撥音、拗音、濁音は、本来中国音に疑似した音形と判断します。